圓光大師傳

世三之四

法然上人行狀畫圖第三十三

うくて南都北嶺の訴詔次第よりぢり。專修念佛乃興行無為よすぐるところよ。翌年建永元年十二月九日。後鳥羽院熊野山乃臨幸あわき。そのころ上人ゝ門徒住蓮安樂等乃ごとくゞ。東山麓の谷ゝて別時念佛をとゝめ。六時礼讃をたてらむ。ぢぢ北面ゝ柏子なく。ゝの、哀歎悲喜ゝ音曲をなしとさはめづる

九曜文庫

しく出家うけわたしまし。聽衆たほくあた
よりて。發心する人をあまたきこえ〜中に。
御所の御留主に女房出家に事あらたまれり。
還幸ならせあしたまりて讒〜申人やいわ
ん。おほきに逆鱗ありて。翌年建永二年
二月九日。住蓮安樂を庭上にめされて。罪
科せ〜ものとき。安樂見有修行起瞋毒。方便
破壞競生惡。如此生盲闡提輩。毀滅頓教永
沉淪。超過大地微塵劫。未可得離三途身の
文盲誦〜するに。逆鱗いよ〜はなはだしく。
官人秀能よおほせて。六條川原にて安樂法
死罪よりたこなふ〜時。奉行に官人よりいと
まをこひ。むなしく日没の禮讃を行するに紫雲
うにこもりたれ。諸人あやしみなすと
ころよ。安樂申けるは。念佛數百遍のうち十念を
唱へんなまりてきるべし。合掌こうぞれどもく。

右ようさだ本意をさげぬと知るべしといひて。
高聲念佛數百遍のくち十念をとなる時
きゝまゐらせていひつるようたるべし。合掌こうし
まゐらせて右ようよりわ見聞の諸人随喜し
涙をながし念佛より歸する人おほかりけり

罪悪生死はなはだ愚癡暗鈍なれども、ながく上人の化導によりて、ひとへに弥陀の本願をたのみ奉るところよ。天魔やきをひらん。安樂死刑にをよびてのちを逆鱗なをやはばかりてかさねて弟子は師匠にをよぼさず。度縁をめし。俗名にかへしたまふ。遠流の科にをこなはるべしと云々。藤井の元彦云々

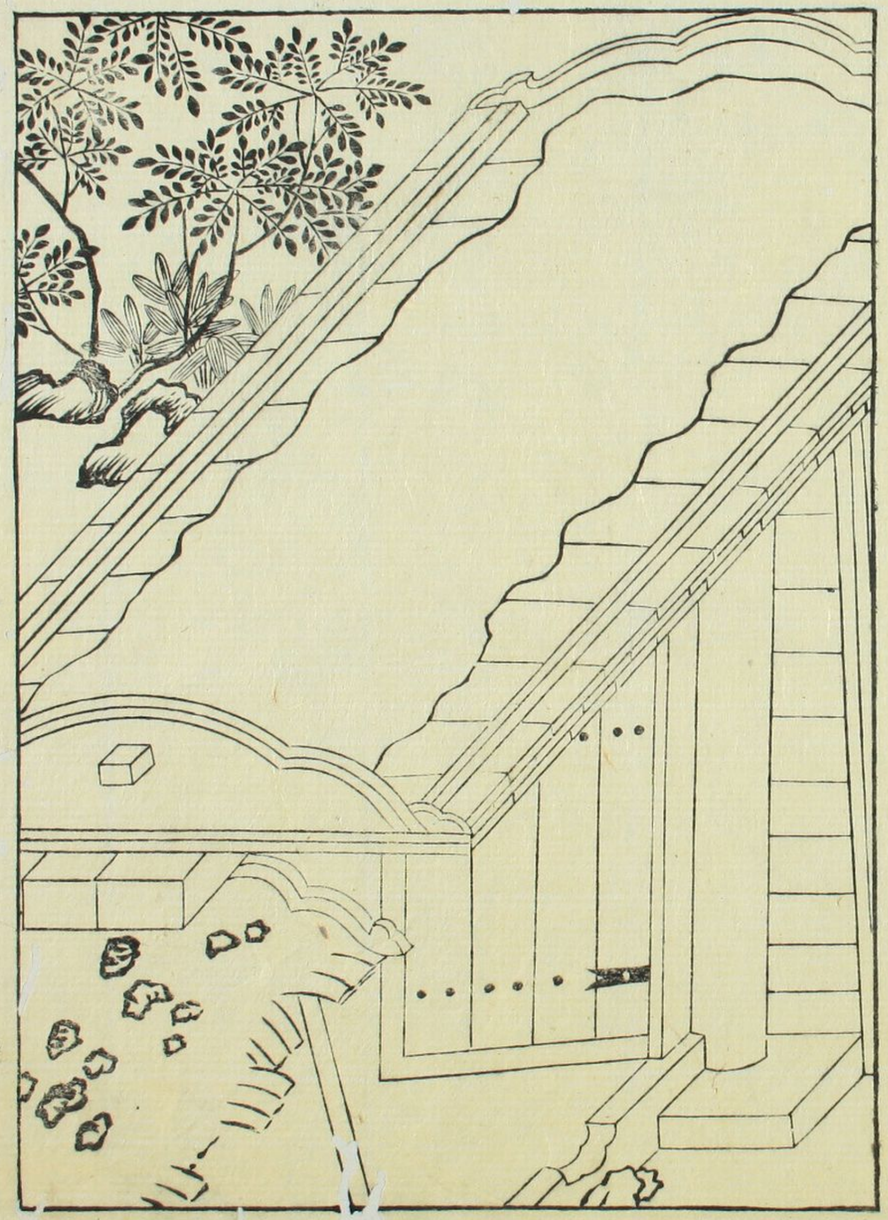
宣下状云

太政官符　土佐國司

流人藤井の元彦　使左衛門の府生清原武次　従二人

門部二人　従各一人

右流人元彦を領送せしめ、ぐんらの人をさして發遣せしめ、國司をして兼知して例によりて法を守り路次の國々をして食濟具馬参疋を給はしむ



府到奉行

建永二年二月廿八日　右大史中原朝臣判

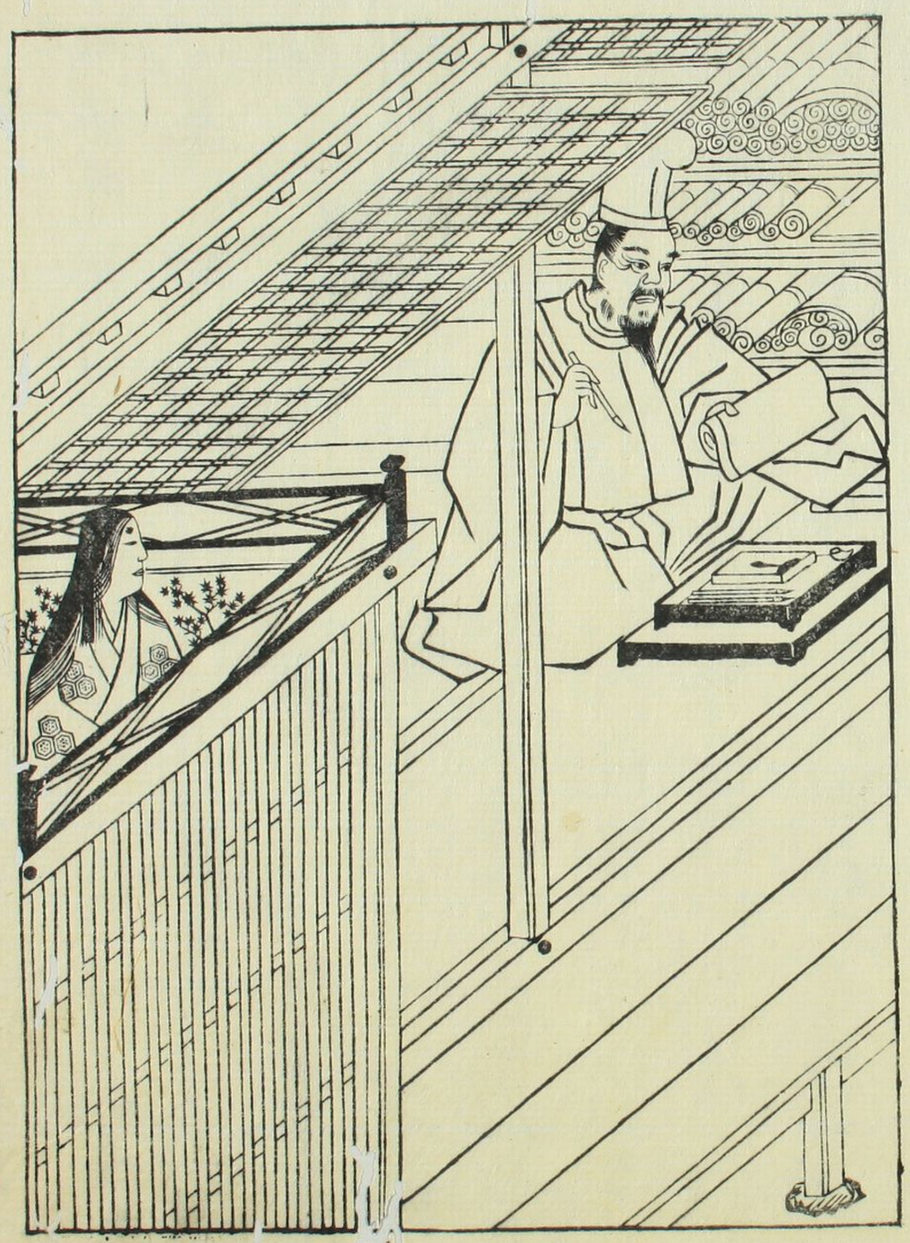
左少辯藤原朝臣

追捕の検非違使宗府生久経領送使し、

左衛門尉府生武次なり。上人の勸化をあぬく

貴賤往生を素懐をのぞむ道俗ぐぐきうれ

しむ事たとへ様なしとぞ



門弟等なげきあへる中に。法蓮房申されけるは
住蓮安樂はすでに罪科せられぬ。上人の流罪は
ただ一向專修興行の故こそ。云云さてこの國に老邁の
御身。遠遠の海波をわたりたまふ。御
命安全なるべし。我等恩顏を拜し嚴旨をう
けたまはるべし。又師匠流刑の罪をの
がれたまはんこそ。のこりとどまる門弟面目あるべき
うへは勅命なれば。一向專修興行をゆるむべき

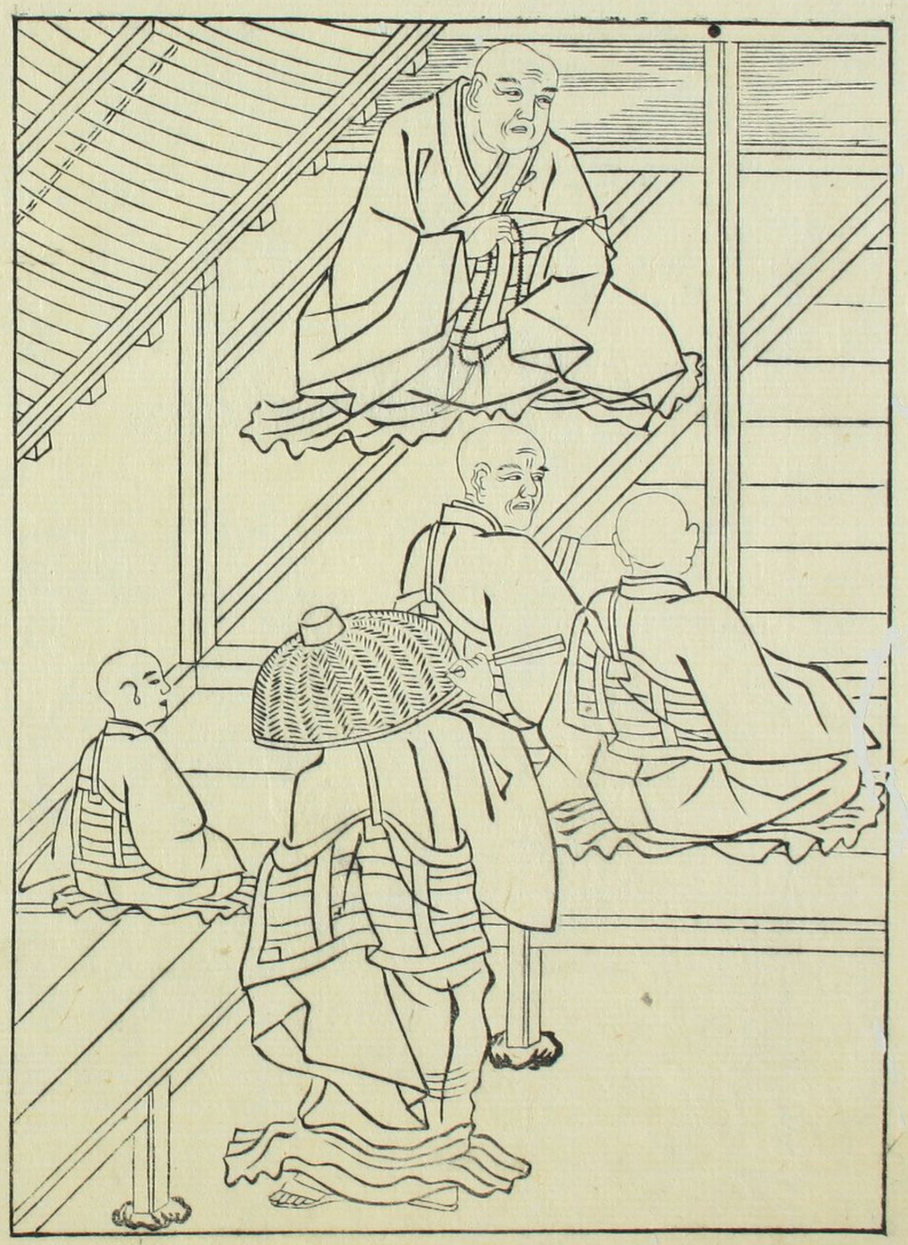
よしを奏したまひて。門こ御化導宜しくや
はべらんと申されければ。一座の門弟たちこの
義に同じ。上人の殆て流刑に
ならるべきことをすべからず。それゆへは齡すでに八旬に
なりぬ。たとひ師弟たがひにやこの住すらん。
娑婆の離別にてはあるべし。たとひ山海を
へだてゝ。浄土の再會なんぞうたがはん。又
いきてゐるは人の身なり。たとひ

いへとを死をるべき人のいれちがへなんぞの事
をぞうをこころるよりんやまつのをなを法念
佛の興行洛陽よりて年ひさう邊鄙り
たもむきて田夫野人をすゝめん事年来より
本意なりまつれどうを時いたりぬして素意
いまぐとをるちぢぬいま事ゆ縁よりて年来の
本意をとげん事すこぶる朝恩とをいへし
此法の弘通ハ人をとめんとすとも法ちをれよ

ぞうをるを法ぞうを諸佛濟度ゆちうひ物を
冥衆護持乃約束ゆなんぞうをたりまつれいなんぞ
世間の機嫌をとぐかりて経釋の素意をの
くをべきやまぐしいるむとをろハ源宣ろ
興をる浄土ゆ法門ハ濁世末代乃衆生ゆ
変定之出離乃要道なるぞゆへよ常随守護乃
神祇冥道ぢぐ免て無道乃障難をとぐ免
弥ぐんの命あるんをぐ因果ゆむ

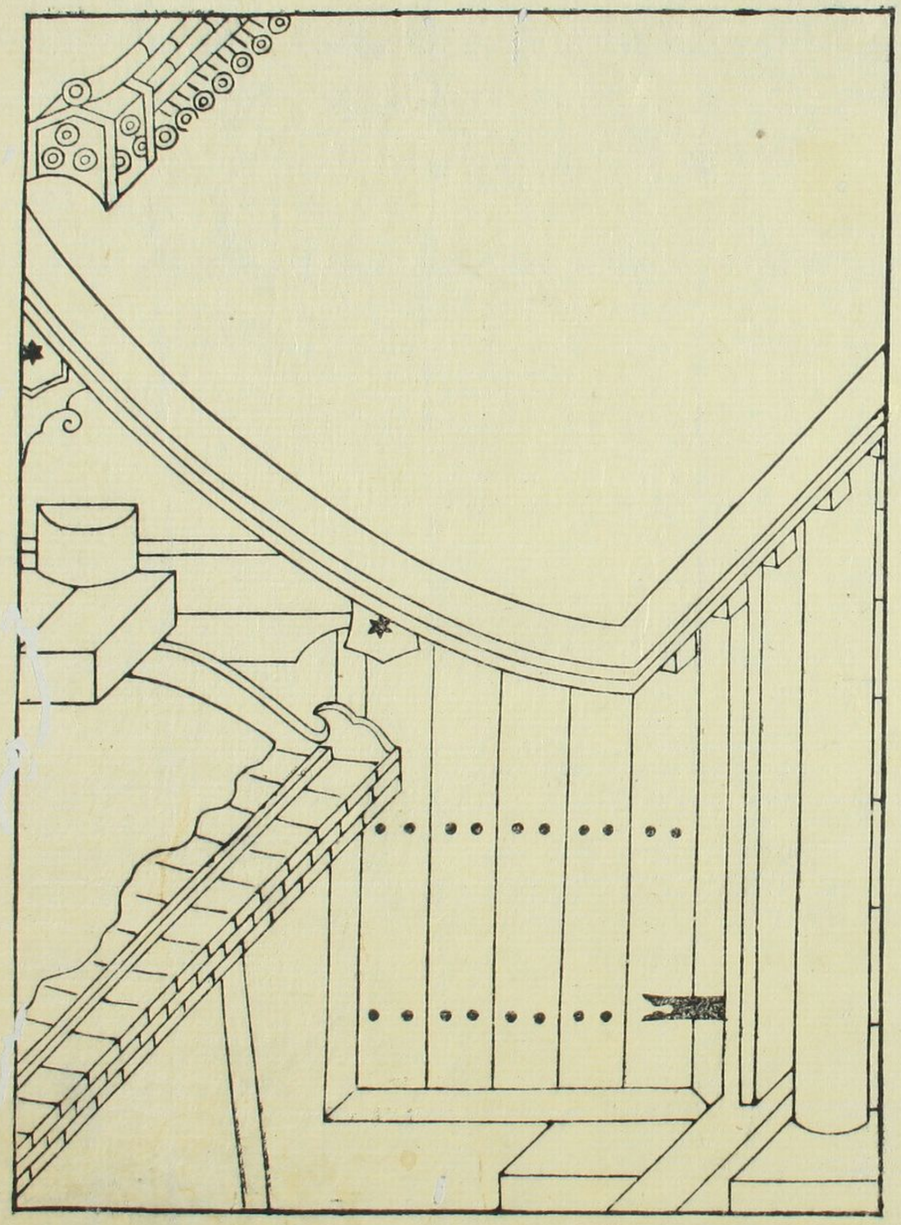
かゝぢる事なれたるにあいすへし。因縁いきぢ。
あんぞ又今生に再會たるゝんやとそれは
ぢゝに申るゝ。一人の弟子に對して。一向專
念乃義をのみ申なり。御弟子西阿弥陀佛
推業してかくれたるに御義ゆゑくく有
申なれた。上人のゝ返事を申なへる法こ
見ぢやと。西阿申はゝ。經釋の文に為りと

いへるを。世間の機嫌を存るゝぢりなりと。
上人又の給いくやうまたたゝし死刑に成をれる
ゝをこれ事いとゝ法はあるべゝ法と。至誠乃
いろをこも切なりやうてまつる人をし涙を
ぞたゝ〳〵ゝ法

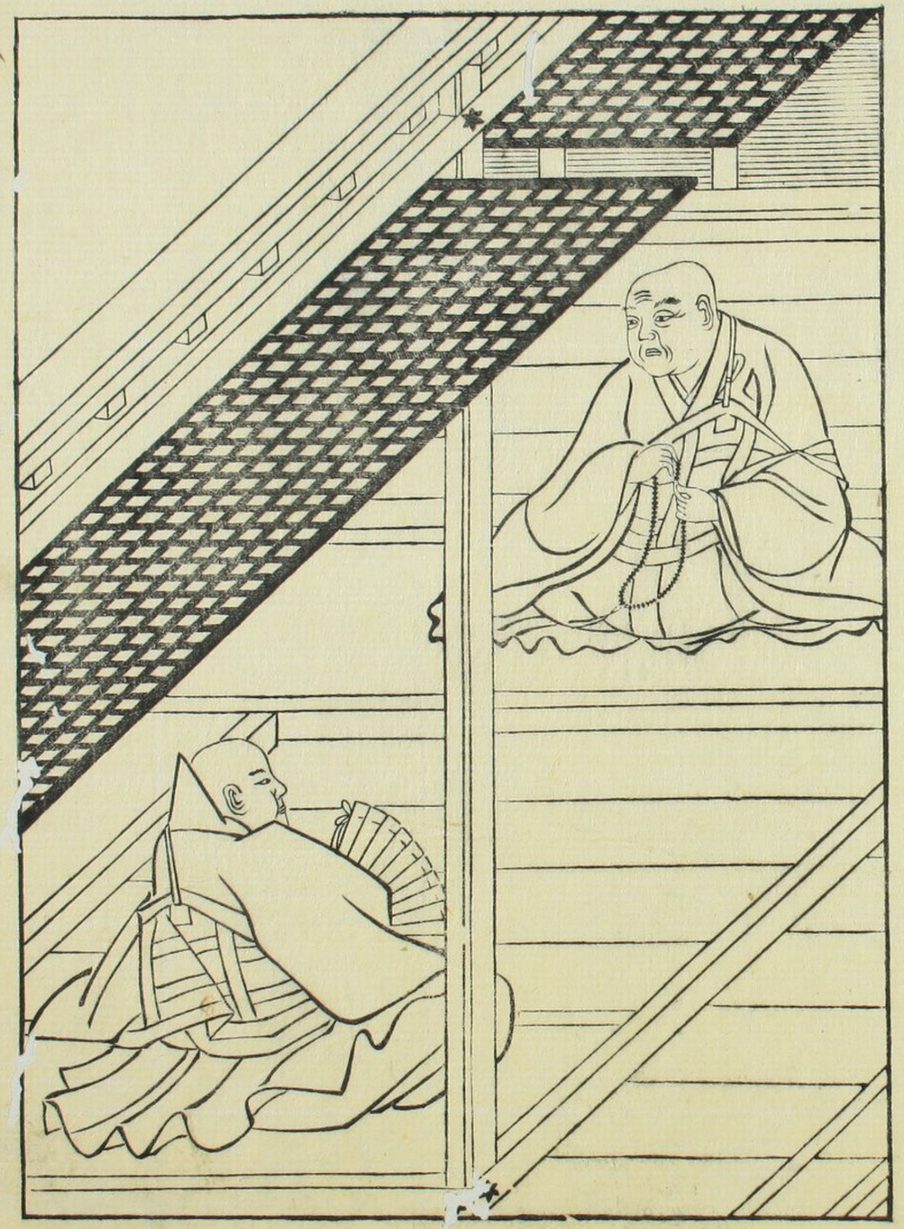


官人小松谷ハ御房よりひていそき配所へ
うつ里給へきよし責申されけるゆ
こやこをいでたまふ。月輪殿御餘波をたうて。
法性寺ハ小御堂より一夜ら免たてまつる
りゆ。禅定殿下ハ忠仁公十一代の後胤累代
攝録の臣ら。朝家ハ憲政詩歌乃幹。
君これをゆる。世これをあふきたてまつる。
栄花重職の豪家よあそび給といへとも。偏よ

順次往生の御のぞみをなしたまふ。御出家の後は、
數年上人を屈請して出離の要道をたづね、
淨土の法門を談じたまふ。上人の頭光後ゆ乃
あらゝ拜見し奉るに、のちゝ一向に生身の佛の
たもひをなし奉るをたかゝぶるなり
動動をあらはしたまふ。後きうに免
ふ。御なげきなをはなはだ去年建永
元年三月七日後京極殿よりにかゝれさせ
給ふ。御ゝうけにて三十八よそなり給ふ。
これよりたまてゝいよ〳〵今生の事後れぼ
ゝすてゝひとすらに後生菩提の御いとなを
なり。上人よりは御對面ありて生死無常の
ことわりをきゝ奉りめゝ往生淨土の御こ
ゝろ功をかゝるよりゝ卿御心をもなくはちを
給ふるに。上人左遷の罪よりあゝ給ぬる事。
いとれる宿業よりて。かゝ御ゝ後ゝんきゝん



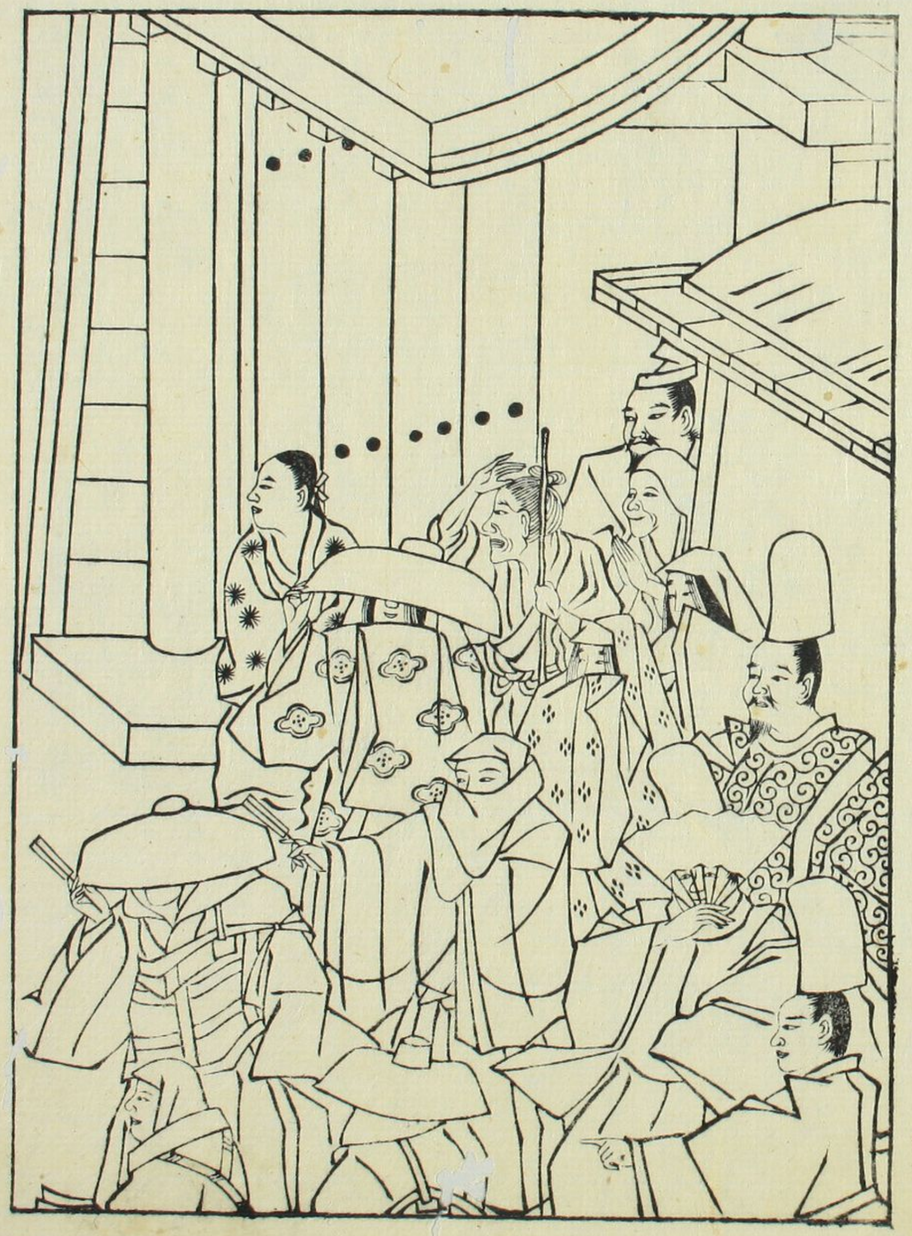
とて勅勘ゆるしたまへる上人い御歎いとなり
なりて禅閤の御悲あるべきにはばかりなくて
まつる人を心ゆをさごろなき程ぬかこの
事ゆゑ申さでめぐる事いきて世にあるこい
なりぬとも御勘氣ゆゑ免なり左右ゆく
申さんもゆゑ恐ふく連てよ御氣色をう
かゝひて勅免を申をこなふべきぞおほせ
らるる



法然上人行狀畫圖第三十四

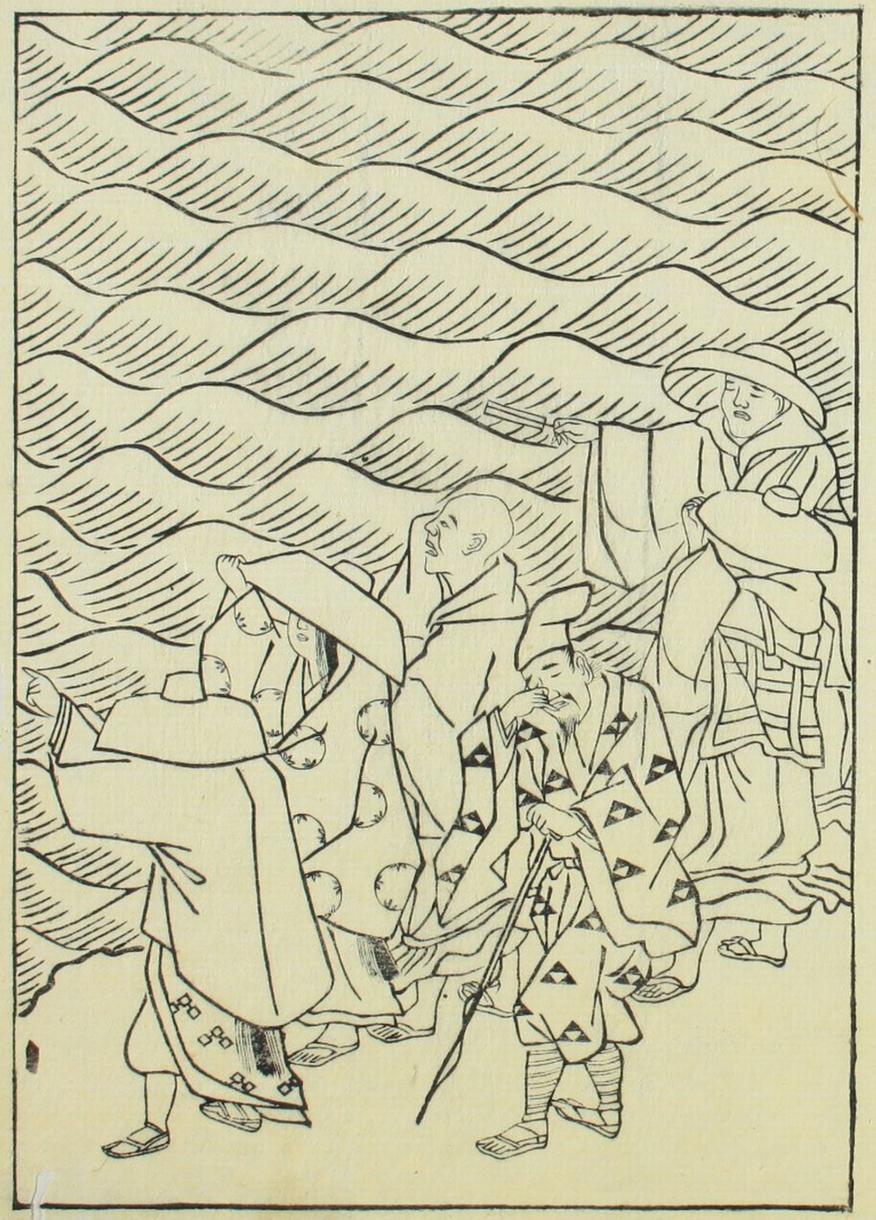
三月十六日より花洛を發ていで〻奥境へ下れ
ひき給へり信濃國より御家人角張の成阿弥陀
佛力者に棟梁ら〻て最後の御ともたりとて
御輿舁くわたなりにまつ〻ひきてまつる
僧六十餘人なりをよそ上人の一期の威儀馬
車輿など〻てのわ給へり金剛草履よりて歩
行し給ふ老邁ゆへ長途たやすく

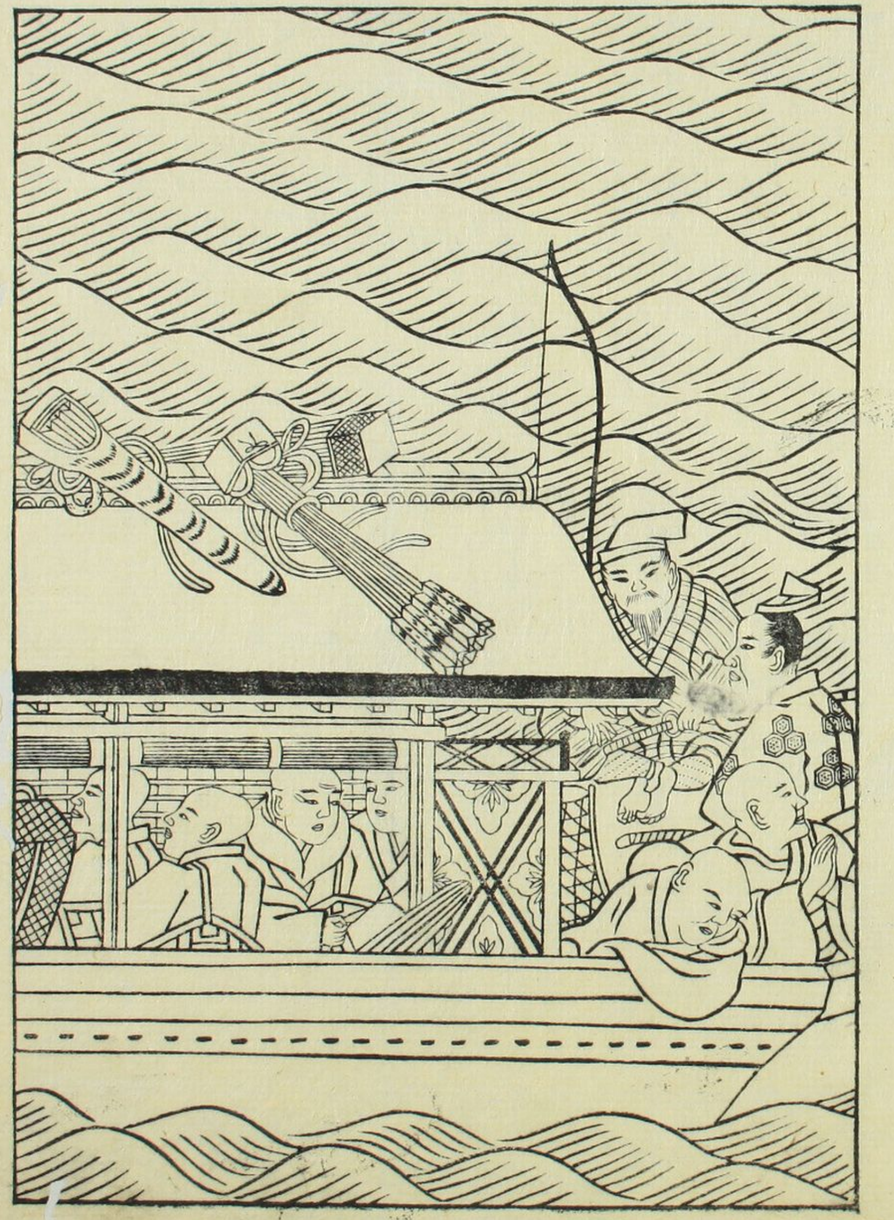
かつぎたてまつりて乘輿あるにて御な
ごわ殘たりと前後左右よりまもる人
幾千萬といぬ事をまつ所貴賤ひしめむ
るもちまもりてこそ道俗のまつぬ渡地を
かるかぎりの殘いさんなること繁よい。
驛路ハこゝを大聖ゆく所也漢家よハ一行
阿闍梨日域よハ侵優婆塞謫居ハ又權化乃
すむ所なり震旦よハ白樂天吾朝よハ菅
原相なり在纏出纏ゝれ必宅なり眞諦俗
諦ゝれ水驛なりとぞおぼしめす。
さて禪定殿下土佐國まてハあまりにたゝる
なる所なりつゝ知行乃國なれとて讃岐
國へぞうつしたてまつれる。御なごり
やゝうれくおぼしめすゝやゝ禪閤御
消息を送らるゝよ。禪閤御
ぬれとそゝゆくいつれのゝなれこ

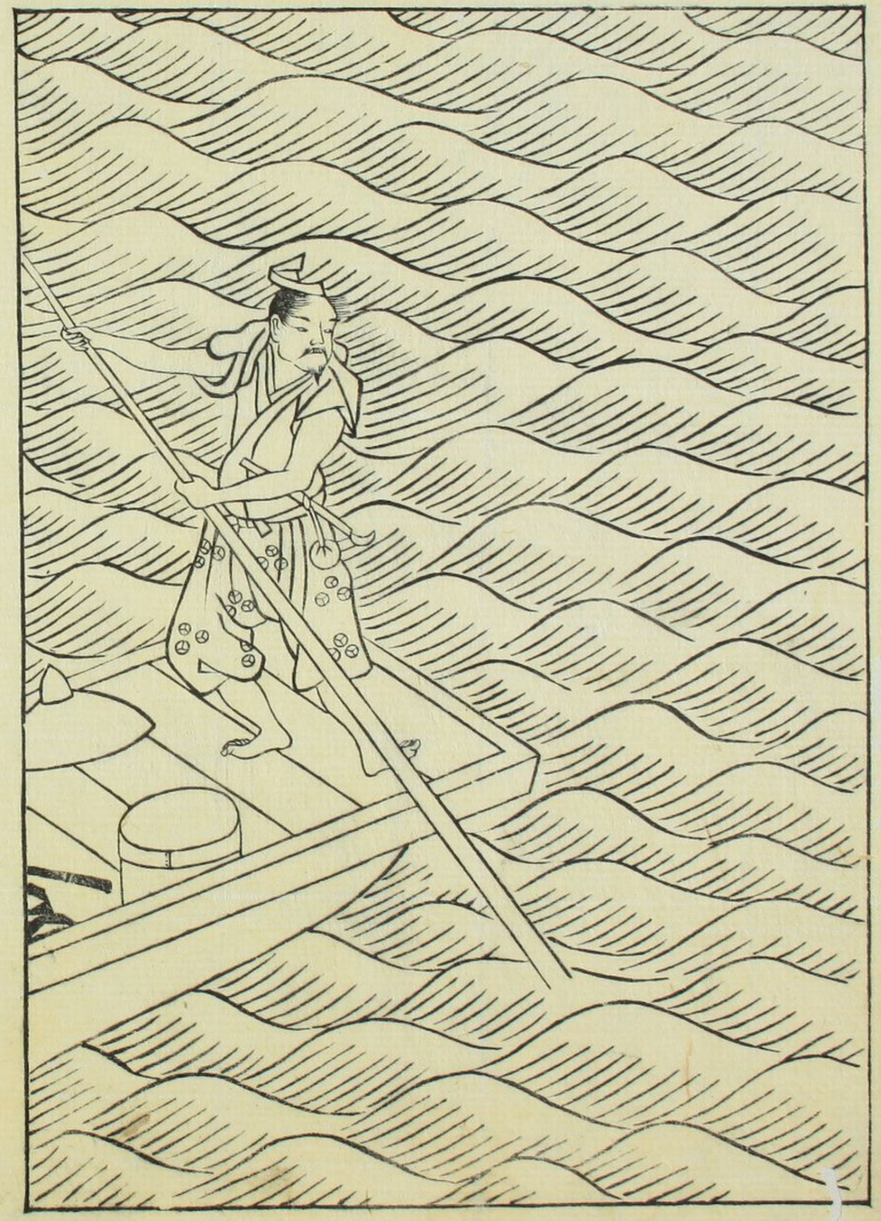


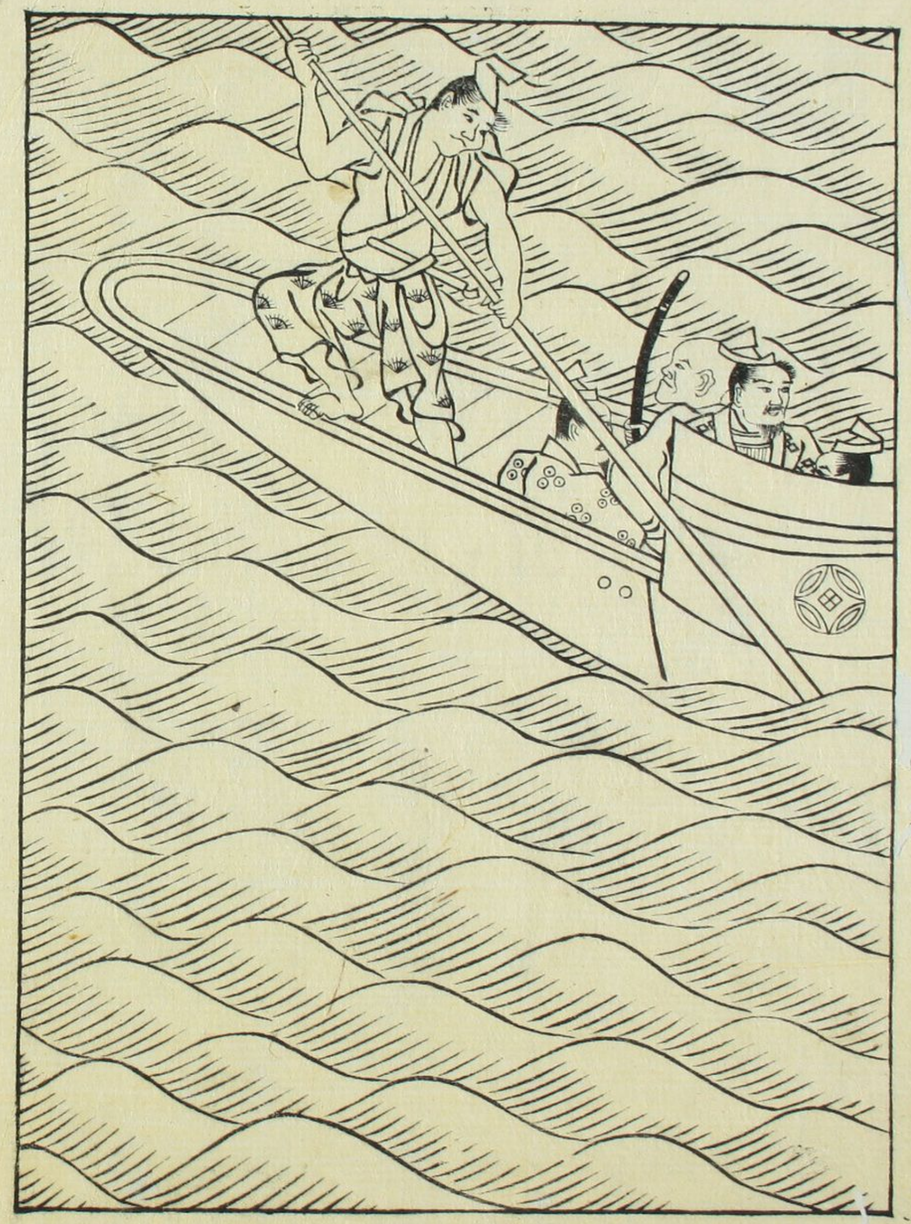
ふこうの法へまことをたえぬ
と待られた。上人西方
露の身いこうこにてきえめとを
ゝろい却り花のうてなそ

鳥羽のうれん妓門より川船にのるく
もぐりたまふ

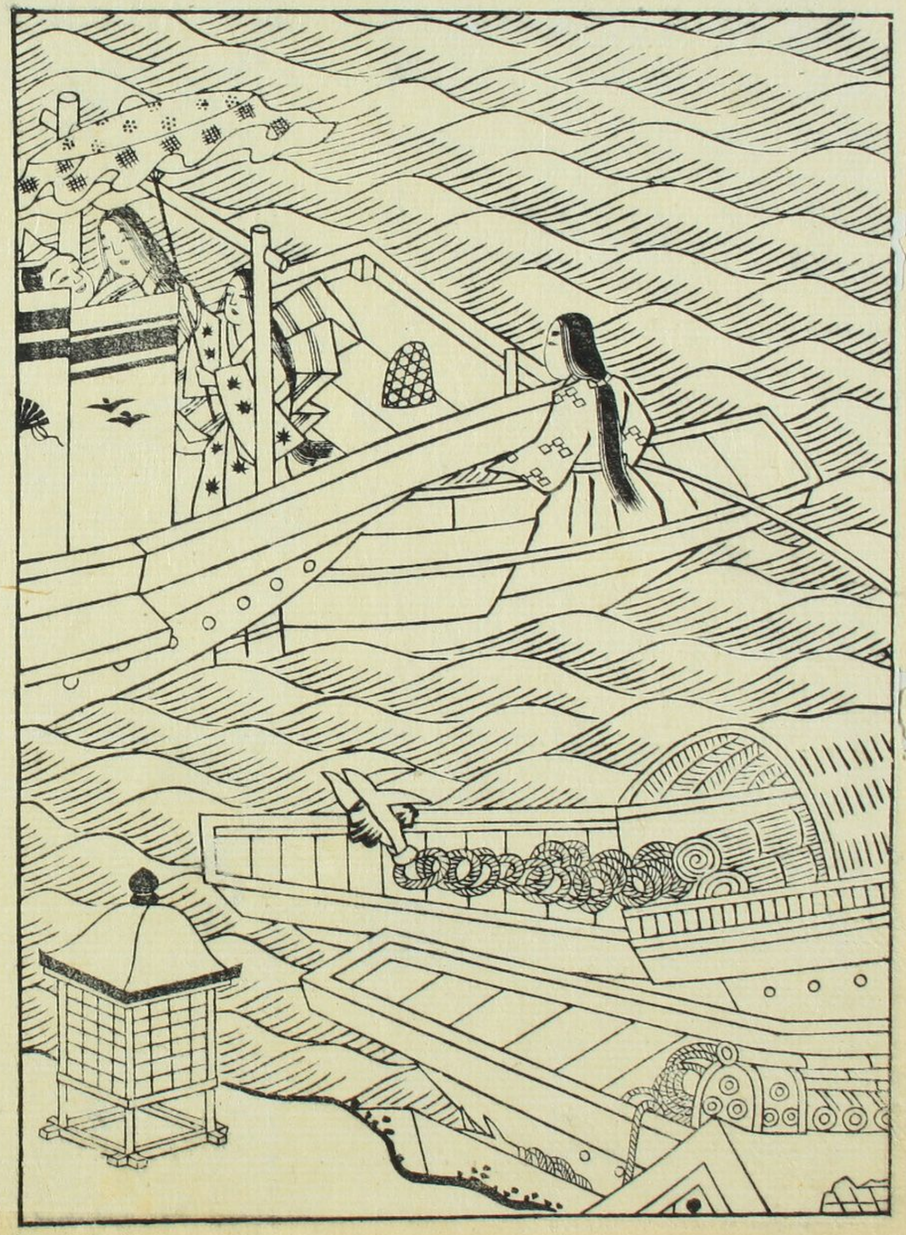








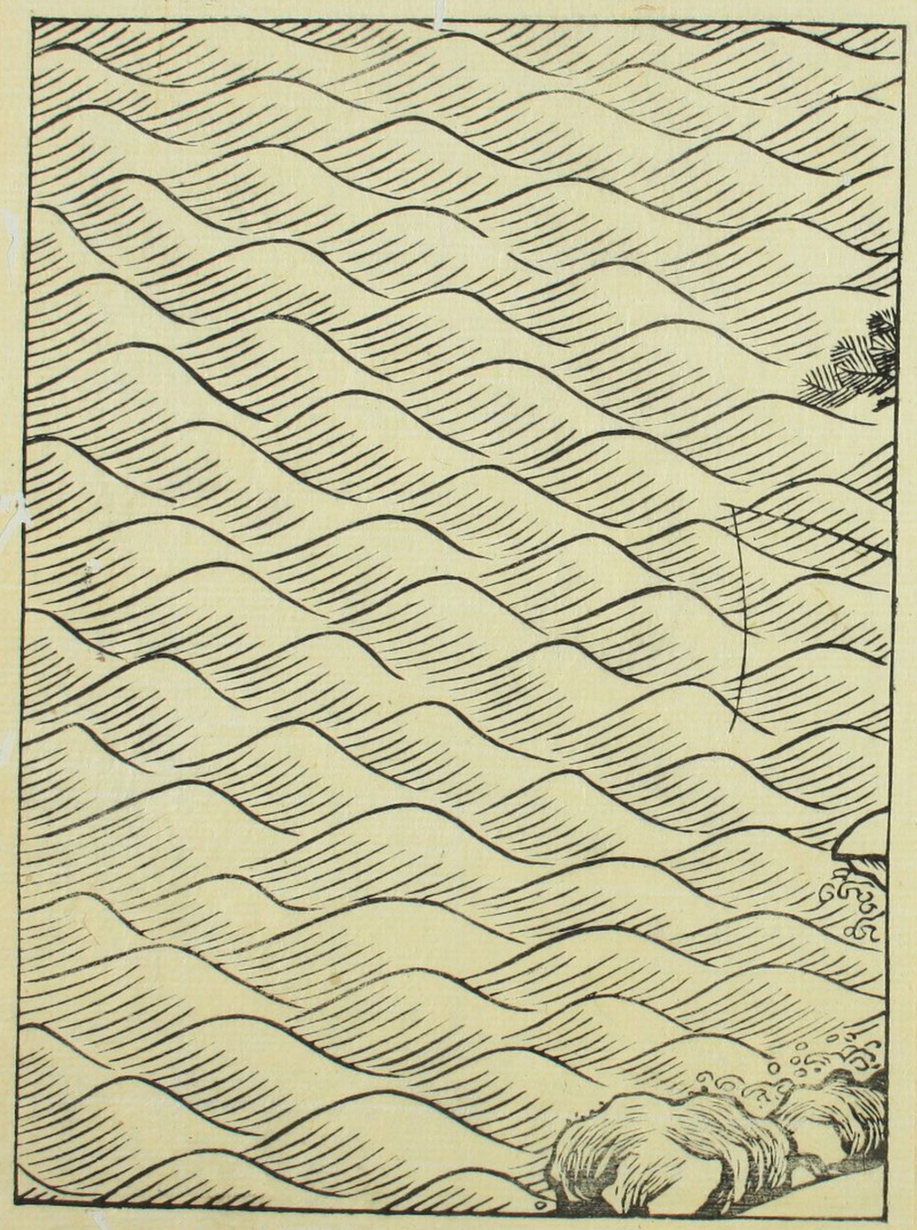
摂津國経ノ嶋ヨリつき流れたるなり。
平相國安元の寶暦よ。一千部の法華経を
石の面ヨリ書寫し。て漫たる波ノ底ヨリ
ちぶ。鬱たる奥鱗をすくうんがためにて。
村里ノ男女。老少そのうすおほくあつまりて
上人よ結縁をうるてやまつりなり



播磨國高砂の浦にて孫ひろく結縁し
たる中に七旬あまりの老翁六十あまりの
老女夫婦なりける中に風いたく吹ハこの
浦のあま人ども打さたくるすれらわを
業とし。あたゆへよいろゝの命をた
ちて世をわたるなりこゝ沒して命終
ころをもれい地獄にたちてくるこゝへ
かゝる住なりたいこゝて亡き魂まぬうき

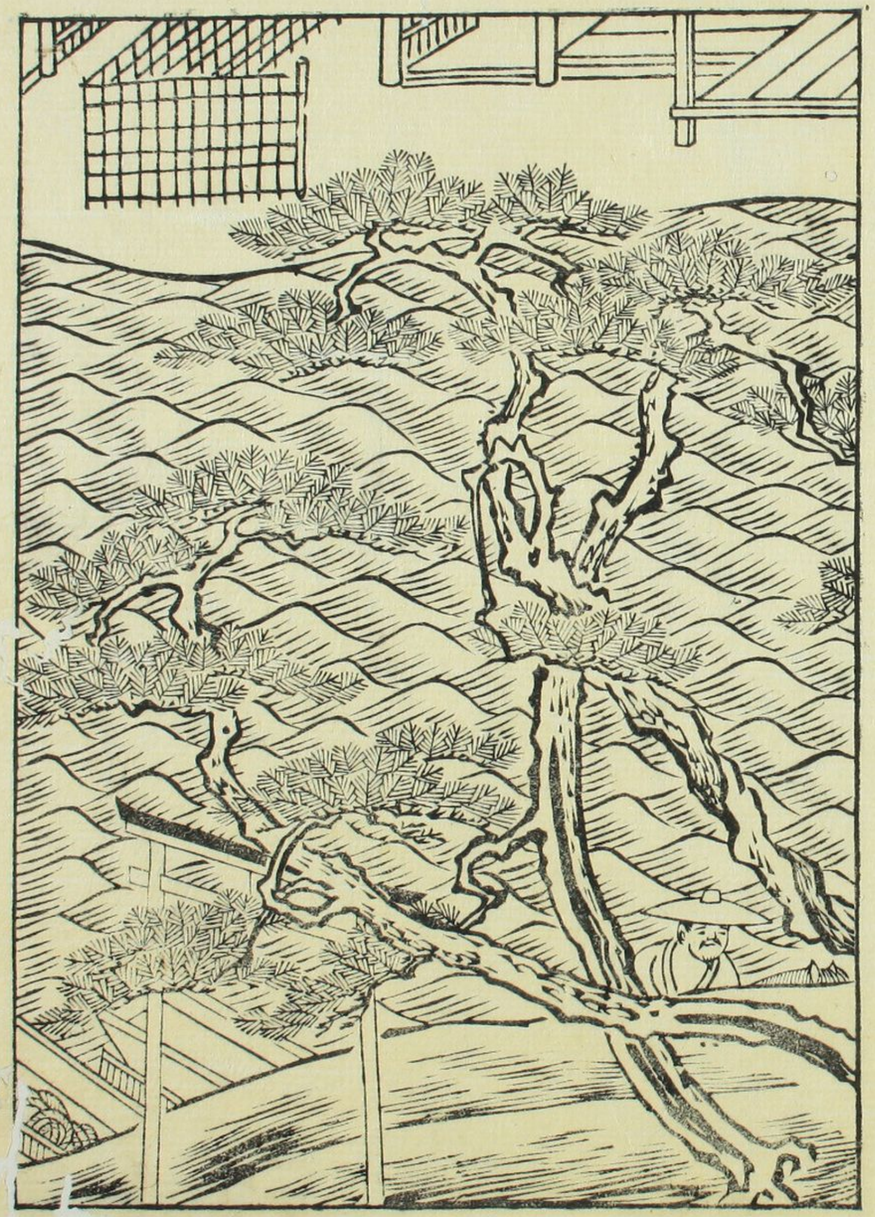
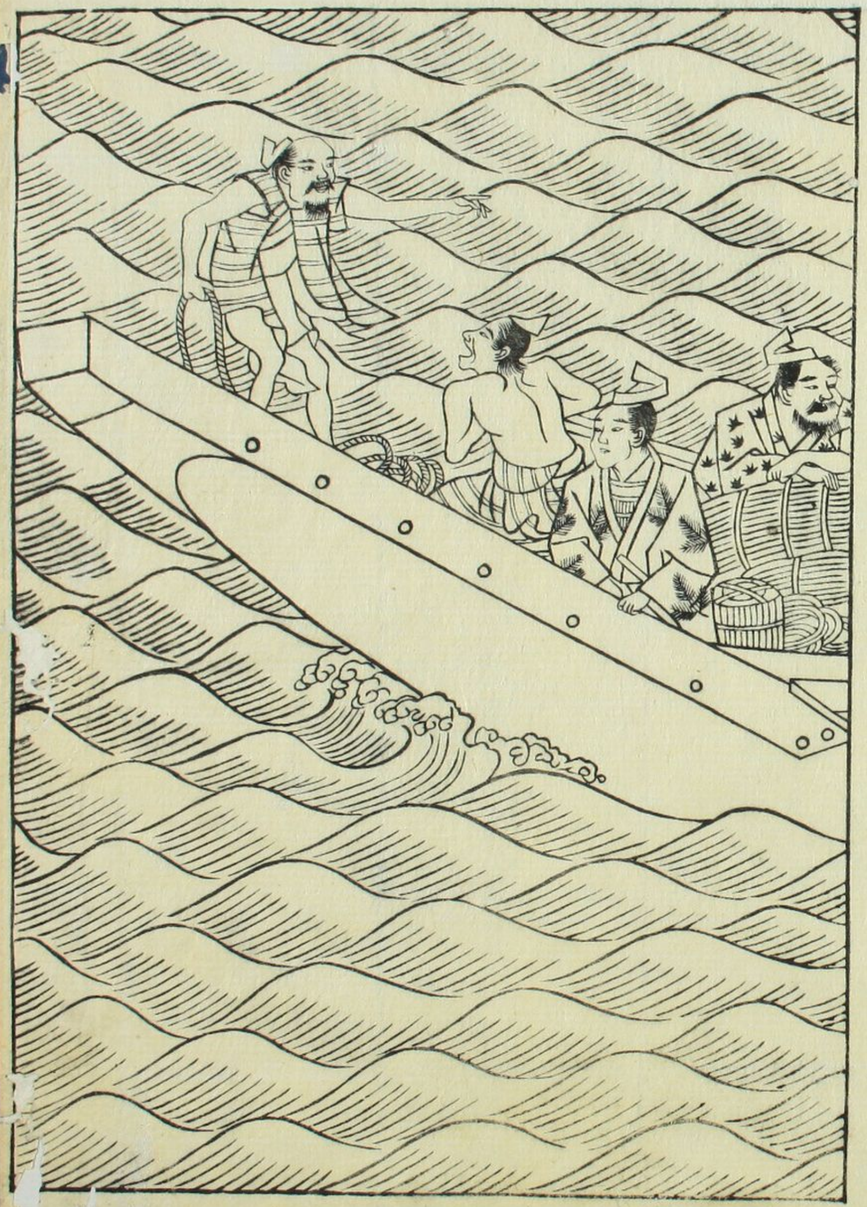
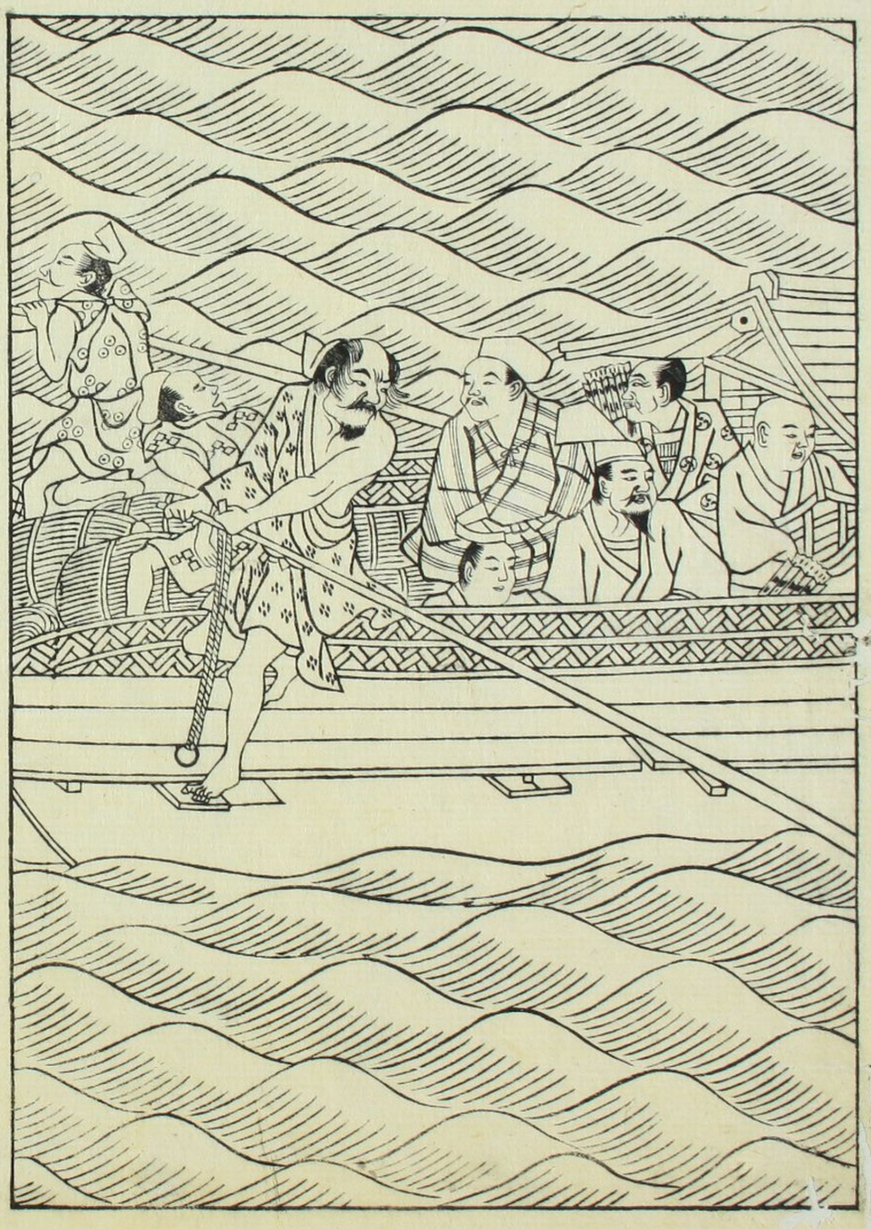
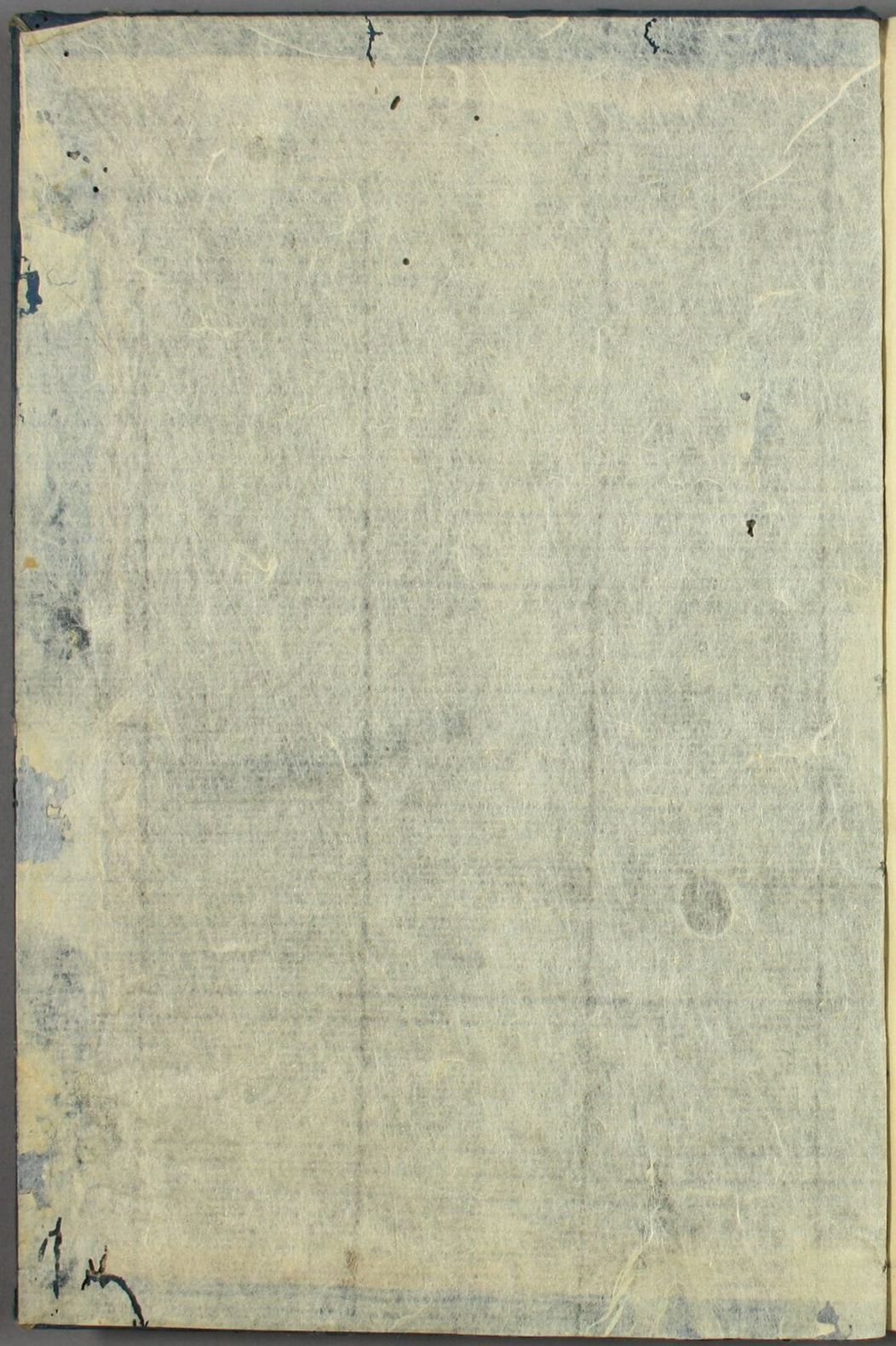
往生べきたねをけさせ給へらんを手本あつせて、
たゞまことの上人あらはれて海うこゝく滅をはも。
南無阿弥陀佛とゝなへ給ふ。佛の悲願を
乗じて浄土に往生すべきしるべなんとろよ
ゝ〳〵へ給ふれとも二人とゝに渡よむせびゆく
ゝろこびなわ。上人の伝授をたまはつをく
後いひろい浦よいでゝ手よすれどもとる
事やまぐろあれとも。口よい名号をとれへ。

ゝるハ家ゝようへをて二人ゝをにゝ志をあげて。
終夜念佛とる事。あらはれ人をおど誘を
ゝゝりなをなわ。ばるゝ臨終正念ゝして。
往生をゝこげゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
機類万品なれゝゝも。念佛すれゝ往生する
現證なりゝゝゝたにほせゝゝれなる



同國室ノ泊リ付き船よ。小船一艘ち。
ばきたるこれ遊女がうなりちち。遊女
申ちく上人の御船ようけたまつわて
推参ち結たり。世渡りる道きちくみわ。
いうたるたをありて。かつ南身こたり結ん。
これ罪業たをきみ。いうてうのち乃世
たすり進へきこ申ち社こ。上人あり社こて
の弟ちくぞよをちちうにて世をりる事

弥陀罪障よりこれ。剛報まる。
そもりかつてそもりかつ。弥陀ずして世をワもり
弥ぬべきそもりことあるべ。そこやにろれ
ものぞ。弥へし。餘れそもりこそを
たく。又身命弥うへもこぐるほどの道心いまる
おこわたまいぼいそもくそれまくよて。をそれ
念佛ものへし。弥陀如来いぼやうれる罪人のあに
こそ。弘誓ををたてもはへる事にて侍れ。て

ふく本願をたのこそてあへて。早下する事なれ
本願を憑て念佛せい。往生うゞひあるはき
よ。ゆんこそるよをへ弥々れい。遊女随喜れ涙を
たゞ。そもの。ものにて上人の弥々るいこれ遊女信心
堅固ならぼめて往生弥らくへしと。歸洛の
ときこそにてたゞひ弥々れは。上人の御教訓を
うけまいもてのもらいこれあるもちまち山里に
もこそて。一もぐに念佛しぼ侍ぐいくほとれくて。

臨終正念うして往生願らげ侍ること人事
なれども所りんくるとぞおほせられける